

# いま地域医療は

自治医科大学卒業生  
からの現地レポート  
NO. 307

## ライフワークバランス

国民健康保険 知夫村診療所

山之内 智志 (島根県)

私は、平成十七年に自治医科大学を卒業し、初期臨床研修を終え、広島県境の中山間地域にある公立邑智病院(九十八床)で内科医として二年間過ごし、本年度より知夫村診療所へ赴任しました。当診療所は本土から約四十km離れた日本海上の隠岐諸島・島前地域に含まれる知夫里島にあります。島唯一の医療機関です。島の人口は約六百五十人、牛は五百頭、タヌキにいたっては二千頭とも三千頭とも言われています。高齢化率は四〇%を超えており、信号やビルもなく、漁業と畜産を中心としたのどかな島です。私の所属は知夫村診療所ですが、実際には知夫里島に居を構え、火・金曜は診療所で勤務し、残りの三日間は

島前地区唯一の入院施設のある隣の隠岐広域連合立隠岐島前病院(四十四床)へ内航船で通い検査・外来などの勤務をします。船での移動は二十分程度です。私の不在となる診療所には島前病院から内科小児科系総合医と外科系総合医が外来勤務に来てくれます。

基本的には休日夜間も含めて、医師は私一人なので、三百六十五日が救急当番です。入院が必要な患者が出た場合は、まず診療所で初療を行い、心筋梗塞や多発外傷など専門施設への移送時には直接、本土へヘリコプター搬送を行います。それ以外の肺炎や心不全、脳梗塞など多くの疾患は島前病院へ村が保有する救急艇で搬送します。島前病院の医師とは普段から

連携を取り合っており、患者情報も共有しているので、入院適応の判断などさまざまな場面で協力してくれます。また、大病院のような入院時の敷居の高さはなく、気軽に経過観察入院やCTなどの検査依頼ができ、断られることもありません。この親密な連携、バックアップがなければ、五年目でまだまだ経験も少ない私のような若い医師が島に一人ではやっていけないように思います。また月一回ではありますが、本土から代診医が週末に診療応援に来てくれるため、島を医師不在とすることなく、島から出ることができます。このような勤務環境を整備してもらい県や先輩医師に感謝しています。

さて、今回テーマに挙げたライフワークバランスについては医療界でもいろいろあるところで議論されているものと思います。離島の一人診療所という視点からこのテーマについて書こうと思います。外来・検査などで午前中は毎日忙しいですが、基本的に入院患者を主治医としては持つことはないのです。午後は往診や健康教室、予防接種などを行い、比較的ゆとりと過ごすことができます。時間外での呼び出しは比較的少な

く、大病院のように朝から晩まで働いてバーンアウトしてしまうような感じではありません。しかしながら、自分の代わりがいらないため、いつ呼び出されるか分かんなく、せっかくなの大自然の中で生活していても、ゆつくりと海遊びをしたり、船に乗ったりなど余暇を十分には満喫できていないのが現状です。

現在、島根県では義務年限内の医師で診療所への派遣は当診療所だけです。難しい検査手技などの経験はなかなかできませんが、保健活動や行政との連携については、病院勤務ではなかなかかわることができません。何より地域住民との関係がうまくいかなければ、患者満足も得られず、仕事もうまくいきません。人間としてのバランス感覚や地域住民との距離感、そこに地域医療の醍醐味や難しさがあるように思います。自分も地域の一員となり、生活を楽しみ、地域のニーズを理解し、この地域で自分に何ができるかを考え、さまざまなことに挑戦していければと考えています。また、自分がここで感じたこと、学んだことを後輩へも伝えていきたいと思っています。